労働者協同組合物語

第4回：協同組合運動の黎明
ウィリアム・キングの協同思想

中川雄一郎（協同総研理事長／明治大学）

ブライトンのウィリアム・キング博士（1786－1865年）は、次回で述べるオウエン主義者のウィリアム・トンプソンと共にイギリス協同組合運動の黎明期を代表する、優れた「協同組合人」であった。キングもオウエン主義を信奉した。

ウィリアム・キングの社会活動

キングは、1786年4月、ロンドンの北東部およそ110㎞に位置する、サフォーク州の州都イプスウィッチに生まれた。キングの父ジョン・キングはイプスウィッチ・グラマースクールの校長を務めた、教育熱心な人物であった。キングは、15歳でウェストミンスター高等学院に学び、その後ケンブリッジ大学に入学した。彼は、ケンブリッジ大では医学を専攻する傍ら、政治経済学、道徳哲学、近代史および数学に特別な関心を払った、と言われている。医学以外のこれらの学問へのキングの関心が彼を優れた「協同組合人」にさせる1つの重要な契機になったのである。ケンブリッジ大学を卒業したキングは、ロンドンに移って聖バーソロミューズ病院で医学の研究に取り組み、1819年に医学博士の学位を得た。そして1821年に、ブライトンに近いロッチングデーン村の牧師の娘、メアリー・ホーカーと結婚してブライトンに居を構え、医者としての活動を始めた。

キングが結婚した1821年頃のブライトンは、住民約2万5,000人を数えていたが、この地域も例に洩れず失業問題に悩んでいた。この年にブライトンで貧民救済のための集会が開催され、彼もこの集会に参加する。そしてその数ヵ月後に、チチェスター主教がスポンサーとなり、3名のセクレタリィを擁する「ブライトン地区協会」(The Brighton District Society)が設立された、との情報が『ブライトン・ガゼット』紙に掲載される。キングはそのセクレタリィの一人であった。この協会は「貧民の間に勤勉と質素倹約を奨励する―病気によって生じたものであろうと、他の原因によって生じたものであろうと、現にある困窮を救済し、また虚言や詐欺行為を防ぐ」ことを目的としていた、一種の慈善団体であった。だが、おそらく、キングは、この協会に慈善的な限界を感じていたのかもしれない。というのは、キングはその当時「刑務所改革」運動や失業問題に取り組んでいた女性運動家のエリザベス・フライと面識をもつようになるが、彼女が、1824年にブライトンに滞在して心痛を覚えるほど「多数の救済申込者」に愕然とし、このような慈善団体では多くの貧民を救済できないと考

え、既にいくつか設立されていた一種の「共済組合」(provident society)によって補強された協会の設立を提案すると、キングは彼女の提案に直ちに応じたからである。こうして、キングは、1824年に彼女と協力して、以前の慈善団体から改組された「ブライトン地区協会」を設立し、貧民救済に関わることになったのである。キングはこの協会を通じて社会活動に乗り出すしたであり、彼のこの協会への参加とフライとの協力は、彼が当時の一般民衆の生活に、特に失業問題に大きな関心を払っていたことをわれわれに知らせてくれている。この事実をわれわれが知っておくことは重要である。というのは、後で見るように、何故にキングは、消費者協同組合ではなく、労働者生産協同組合に「労働者の独立と快適で安楽な生活」の可能性を求めたのか、その回答を暗示しているからである。

この頃になると、キングは、貧しい人びとに医療の手を差し延べる「貧民の医者」として知られるようになっていたが、彼は、この地区協会の活動を通じて、アン・イサベラ・ノエル・バイロン、すなわち、レディ・バイロン―詩人ジョージ・ゴードン・ノエル・バイロンの妻―とも面識をもち、協同組合運動で彼女の援助を得ることになるが、レディ・バイロンについては次回に触れることにする。フライは、後に、ブライトン地区協会は「キングの助力なしには成功しなかった。彼の組織能力がイギリスにおける最初の地区協会を形成したのである」、とレディ・バイロンに語っている[1)]。また彼女は、この協会は「貧しい人たちを説いて1年間で約1,000ポンドを貯えさせたが、それはキングの活動によるところが非常に大きかった」、と述べている。フライはまた、彼女の親友で、ブライトンを訪れては地区協会の集会に1度ならず参加していた、ニュー・ラナーク時代のオウエンのパートナーの1人であった富裕なクエーカー教徒、ウィリアム・アレンをキングにひき会わせている。おそらく、キングは、アレンからニュー・ラナーク時代のオウエンの功績や人となりについて聞かされたことだろう。

キングは、ブライトン地区協会の活動の他に別の社会活動にも参加していた。「職工学校」(Mechanics Institution)と呼ばれる、上層労働者の子弟に一般知識と専門技術を教える学校である。バークベック博士、ヘンリー・ブルーアム卿それにフランシス・プレイスなどがロンドンを中心にいくつかの職工学校を設立したことは有名であるが、オウエンもロンドン職工学校においてロンドン協同組合主催の講演会で講演している。キングは1825年に設立されたブライトンの職工学校に深く関わった。職工学校の生徒は学校を終了するとやがて地域の協同組合運動に参加した、と言われているが、キングのブライトン協同組合にもそのことが言える。キング自身が、職工学校での教育の結果、「彼ら（生徒）の精神がブライトンで協同組合を準備したのである」、と述べているからである。キングは、職工学校について、『ブライトン・ガゼット』で次のように述べている。

> 職工学校は、社会に新しい性格を刻印する制度であり、また地方の安寧を促進しようとする人たちからあらゆる支持を受けるに値する大胆で有用な制度である。われわれは、知識ほど人びとの能力を呼び起こすのに十分役立つものはないし、また人びとをして貧困という惨めな恩恵を受けることを恥じとさせるものはない、と確信しているし、その知識は同時に、上辺はありふれた職工のように見えるとはいえ、真の独立に重みと尊厳を与えるのである。[2)]

キングこの言葉は労働者生産協同組合に固執した彼の意思を垣間見せている。それはさておき、ブライトン職工学校は開始早々200名以上の生徒会員が登録され、古典派経済学者のデーヴィッド・リカードが「ガス灯および人工照明一般の原理」(Gas Lights and the Principles of Artificial Light in General)を講義し、キング自身も数学と自然哲学を教授した。しかし、キングたちの努力にもかかわらず、この職工学校は生徒会員数が減少したために1828年に閉校となった。

先に(労働者協同組合物語第3回)簡単に触れておいた、1827年7月に開設された「協同取引き組合」―協同取引き組合はコミュニティ建設の基金を集めるための組織である「ブライトン協同慈善基金協会」の内部に開設された―に職工学校の生徒会員が参加した。この協同取引き組合は、各組合員が5ポンドの分担金で100ポンドの資金を集めるために、小売価格で品物を販売し、各組合員の利潤に対して週1シリングを積立てて5ポンドの出資金を調達しようと試みた。ほどなくして組合員は40人ほどになった。そして1年後に、この組合の販売高は週当り38ポンドにも達した。この組合はブライトンに最初に設立された消費者協同組合であった。キングは、この協同取引き組合にも関わったが、この経験を生かすと同時に、もっと野心的な試みを実践するために月刊紙『協同組合人』(The Co-operator)を編集・発行して、労働者に対する啓蒙活動を行なった。『協同組合人』は1828年5月から1830年8月まで発行された(毎月1日発行)。同じような啓蒙活動は、前回の「物語」で論及したジョージ・ミューディの『エコノミスト』やロンドン協同組合の機関誌『協同組合雑誌』(The Co-operative Magazine)によってなされたが、その論旨は当時の労働者にとってはきわめて難解であった。そこでキングは「誰もが理解できる言葉で労働者に話しかけた」のである[3]。その結果、彼が『協同組合人』を発行した当初は、「共同資本を蓄積するという原則に基礎をおいた協同組合」は4組合にすぎなかったが、数ヶ月後にはロンドン、ブライトン、バーミンガム、カンタベリーなどに10組合が設立され、翌年の4月には56組合、5月には63組合、12月には130組合、そして『協同組合人』最終後の発行となった1830年8月には300余の組合が設立されたのである。

それでは、キングはどのような協同思想と協同組合運動を「誰もが理解できる言葉で労働者に話しかけた」のであろうか、見ていくことにしよう。キングは、共済組合や労働組合にもかなりの紙幅を割いて興味ある論究を行なっているが、この物語では省略する[4]。

キングの協同思想と協同組合

キングは、『協同組合人』第6号で、協同組合の「目的」と「目的を達成する方法」を論じている[5]。

[目的]

①貧困に対して組合員が相互保護し合う。

②生活を快適で安楽に過ごすことに大きく貢献する。

③共同資本(common capital)による独立の達成。

[目的を達成する方法]

①共同資本を形成するために、少なくとも毎週6ペンス出資する。

②通常行なわれている方法とは異なる方法で、この出資金を使用する。すなわち、投資にではなく、取引きに使用する。

③この出資金は、十分に蓄積されたならば、協同組合向けの製造業に使用される(出資金には「取引きから生じる利潤」も含まれる―中川)。

④資本がさらに蓄積されたならば、その資本は、土地を購入し、コミュニティとしてのその土地で（組合員が）生活することに使用される。

この「目的」と「方法」は、労働者が自ら日常生活のなかで節約した資金を出資して「共同資本」を形成し、その資本を消費者協同組合と労働者生産協同組合に使用して共同資本をさらに増やし、十分に共同資本が蓄積されたならばその資本でもってコミュニティを建設し、そこで組合員労働者は快適で安楽な生活を送ることができる、というキングの協同思想に基づく構想を示している。この構想には「ブライトン地区協会」と「ブライトン職工学校」に関わったキングの社会活動の経験が生かされている。

ところで、われわれがもっとも注視すべき点は、キングが協同組合の「目的」の③に「共同資本の形成による独立の達成」を掲げたことである。このことは、実は、先に見たようなブライトンにおける失業問題や職工学校への労働者子弟の入学など、労働階級、とりわけ上層労働者が困窮から抜け出すためには、何よりも「雇用」を創出することである、とキングが考えていたことを意味する。何故ならば、彼は、かつて彼らが保持していた「労働者の独立」の喪失は、彼らが「資本に雇われ、労働条件を資本にコントロールされた」ことから生じたのであるから―とキングは正しく考察していた―労働者としては「資本に雇われずに、また労働条件を労働者自らがコントロールする」実体を組織しなければならない、と労働者に向かってキングが語っているからである。そのために彼は、（誤りや混同はあるけれど）資本とは何か、資本はどのようにして形成されるのか、知識こそ力なり、と労働者に訴えたのである。もちろん、このこと、すなわち、大きな資本は一人で形成することが不可能であるから、集団で、協同の力で形成しよう、と彼は言うのである。労働者が失業することは、それまで彼らが保持していた「財産」とそれに応じた「社会的地位」と「社会的諸権利」の喪失を意味するのであるから、特に上層労働者にとっては協同の力で新たに雇用を創出することは差し迫ったことであった。後で言及するように、キングの協同組合構想の現実的な目標は労働者生産協同組合の設立であり、それによる「雇用の創出」であった。したがって、コミュニティの建設は、あくまでも「究極的目的」であり、消費者協同組合は労働者生産協同組合のための資本形成と資本蓄積の手段であり、さらには労働者生産協同組合の製品のための市場と位置づけられていたのである。

とはいえ、先に記したように、キングがコミュニティ建設を協同組合の目的達成のための最終的な方法だと考えていたことも事実である。彼は既に、『協同組合人』第1号で次のように述べている。

> 資本が十分に蓄積されたならば、協同組合は土地を購入し、そこで生活し、組合員自らがその土地を耕作し、また組合員が欲する製品を生産し、かくして衣・食・住についての組合員すべての欲求を満たし得るのである。その時には協同組合はコミュニティと称されるであろう。[6)]

この引用文から分かるように、キングは、協同組合の目的はコミュニティの建設によって達成されることを示唆しており、その意味で、イギリス協同組合運動の歴史からすると、彼はオウエン主義協同組合運動の重要な環を担っていた、とわれわれは指摘することができる。一方での消費者協同組合と労働者生産協同組合の設立と展開、他方での協同コミュニティの建設、というオウエン主義協同組合

の思想的、実践的パターンはキングにおいても貫徹されていたのである。それでは、キングは、消費者協同組合と労働者生産協同組合をどのように構想し、あるいは実践したのか、それにコミュニティをどのように構想したのか、について簡潔に見ていくことにしよう。ただ、前に述べたように、キングは労働者生産協同組合をもっとも重要視したのであるが、彼が実際に携わった協同組合は消費者協同組合であったことを再度指摘しておく。

(1) 消費者協同組合

キングは、『協同組合人』第4号で、消費者協同組合の長所は「小額の資本でも(事業を)開始することができることである。…組合員は疾病や失業に備えて、共同基金に毎週拠出する。組合員はお互いのために取引きする。組合員は一度に大量の財貨を購入して価格を引き下げる―そして価格の低下分を共同のストックに投入する」[7]、と論じているが、このことから分かるように、彼は、消費者協同組合を組織することによって大量共同購入を実践し、その結果、中間利潤を排除して―つまり、さもなければ中間商人の利益なる分を協同組合が取得して―その部分を「共同のストック」に投入する、すなわち、「共同資本」を形成することができる、と考えたのである。ここで注意すべきことは、消費者協同組合で生じた利潤は「共同のストック」に投入されること、つまり利潤は「共同資本」の形成のために蓄積されるのであって、組合員の間で分配されない、ということである。したがって、このことは、消費者協同組合は労働者協同組合の、あるいはコミュニティ建設の第1段階の重要な手段に位置づけられていることを意味するのである。このことについてはすぐ後でも触れる。

大量共同購入によって利潤を生みだし、それを蓄積していく、というキングのロジックは、ジョージ・ミューディの構想にもあったし、ロンドン協同組合の「補助基金」でも実践され、ブライトンでもブライアン提唱の「協同取引き組合」がその効果を実証した経験に基づいている、と言える。それでは一体、何故にキングは、後の人たちに、「消費者協同組合運動の先駆者」と評価されるようになったのだろうか。それは、一言で言えば、大量共同購入に基づく協同組合の「店舗経営」をより合理化し、それを労働者生産協同組合と結びつけて協同組合経営の持続的発展の可能性を示したことによるのである。少し長くなるが、次のキングの文章を引用しよう。この文章からそのことが見て取れるだろう。

> 協同組合は店舗から始める。この店舗を経営するために、協同組合は1人の代理人を置かなければならない。代理人は組合員でなければならない―代理人は協同組合によって選考される。代理人は、すべての事業で行なわれているように、正規の簿記をつける。また毎週の拠出金を受け取り、代理人を監督し、帳簿を監査するために3人の組合員が受託者(trustee)として任命される。このことが毎週実行されるならば、すべての組合員が協同組合の状況を知ることができる。受託者は、時々交替するので、すべての組合員が事業を行なう方法に精通するようになるだろう。
>
> 初めは協同組合の資本は小規模なので、店舗では組合員が必要とするすべての消費品目を組合員に供給することはできないであろう。資本が増加するに応じて、このことはますます完全になされていくだろう。しかし、組合員の欲求は限定されているので、店舗が必要とする以上に資本が増加するようになるだろう。毎週の拠出金が3ペンスの

定額であっても、協同組合が組織されて1年以内にはおそらくこのような状態になるだろう。そのような時期に至ったならば、協同組合としては、われわれは剰余資本をどのように扱うべきか、という問題を組合員に問うことになる。そしてその答えはこうなるだろう―組合員向けに、靴や衣服などを製造するために、組合員1人を雇用し、彼に通常の賃金を支払い、（残りの）利潤を共同資本に追加する、これである。このようにして、資本が増加するに応じて、協同組合は1人また1人と組合員を雇用していき、組合員あるいは一般の人たちが消費するような他の品物を製造するようになっていくだろう。組合員向けに製造されるのであるから、販売は確実である。だが、もし組合員が消費し得るよりも多くの品物を協同組合の資本が生産することが可能であるならば、協同組合は社会全般に需要のある品物を製造するに違いない。[8)]

このように、キングは小額の資本をもって「店舗経営」を開始し、そこで得られた利潤を「共同資本」として蓄積し、そしてその資本を「生産」に投入する、という協同組合経営の持続的発展を明示すると同時に、組合員の「雇用創出」も示唆しているのである。キングは消費者協同組合を労働者生産協同組合あるいはコミュニティ建設のための重要な手段と位置づけた、と先に述べたのはこのことである。

ところで、キングを「消費者協同組合の先駆者」と評価した人たちは、キングが店舗経営の合理化と―現代的な言葉を借りて言えば―「科学的経営管理」の重要性を説いたことに評価のポイントをおいている。これについても簡潔に触れておく。キングは『協同組合人』第28号で次のように主張して、店舗経営の重要性を説いた。

協同組合人たちは、教育の向上なしにはその究極的目的を達成し得ないように、経営の改善なしにはその当面の目的を達成し得ない。究極的目的が彼ら自身の資本で彼ら自身のために労働することであるように、当面の目的は、彼らの資金を貯蓄銀行よりも有利に、また（消費者協同組合に―中川）就業している組合員のために恒常的な業務を何らかの方法で与えるよう投下することである。こういう目的のために取引きが取り決められたのであり、その利潤は通常の貨幣利子よりもはるかに大きいものである。しかしながら、取引きの利潤は、質と量の双方と、購買における有効な経営に非常に大きく左右される。一方では大量共同購入を行なうことが有利であり、他方ではあまりに多くの遊休ストックをもつことには損失になる。すべての取引きの秘密は速い回転である。頻繁に運転される小資本は、遊休の大資本よりも利益が大きいのである（傍点は中川）。[9)]

見られるように、キングは、労働者生産協同組合の実現を協同組合の「究極的目的」とし、消費者協同組合をそのための「当面の目的」だと位置づけている。要するに、彼は、労働者生産協同組合の実現という目標を目指して、当面は消費者協同組合の展開に力を注ぐよう労働者に訴えたのである。さらに彼は、「当面の目的」は「経営の改善」によって達成され得るのだと強調して、「経営体」としての、企業としての協同組合の意義をも示唆したのである。

キングは、これらの他に、消費者協同組合の経営についていくつかの重要な事柄を指摘している。すなわち、組合員の出資金・財貨の購入/販売・価格・総売上・在庫品などの正確な簿記に基づいた「会計制度の確立」、現金取引

き、品質本位、である。現金取引きと品質本位は、ロッチデール公正先駆者組合の原則であったことは、今では誰でも知っていることである。キングの、消費者協同組合の「優良管理」に関わる実践的指導は、かくして、間もなく(1830～1835年)[10] 開催される「オウエン主義協同組合の世界」と称された「協同組合コングレス」を通じて、オウエン主義協同組合運動全体における消費者協同組合の明確な位置づけを誘発することになるのである。

(2) 労働者生産協同組合

既に述べたように、キングは協同組合の「目的」の第3を「協同資本による独立の達成」であるとし、また「目的を達成するための方法」の第3で、「出資金は十分に蓄積されたならば、組合員向けの製造業に使用される」こととし、さらに同じく第4では「資本がされに蓄積されたならば、その資本で土地を購入し、…その土地で生活していくことに使用される」、と論じた。そしてこれら2つの「方法」のうち、第3は労働者生産協同組合に、第4は協同コミュニティの建設に言しているのである。だが、これも前に触れておいたが、「共同資本」形成による労働者の独立は、協同コミュニティというよりもむしろ労働者生産協同組合を通じて実現される、とキングは考えていた。というのは、彼は、協同コミュニティについては平凡なありきたりの構想しか示していないからである。それでは、彼は「共同資本」をどのようなコンセプトで捉えていたのか。このことを論究すると、さらに多くの紙幅を必要とするので、簡潔にまとめておこう[11]。

> 労働者階級が貧困から抜け出すためには、労働者は「資本家のために」ではなく、「自分たち自身のために」労働することである。

しかし、労働者は、孤立している限りそうすることはできない。「自分たち自身のために労働する」ためには、資本が必要なのであるから、労働者は、協同組合を組織し、協同組合に参加することによって資本を形成し、蓄積することが可能となる。労働者にとっての「一般的な資本」は「自らを維持するための衣・食・住」に必要とされる賃金部分=生活手段であるので、この生活手段を節約して労働者は資本を形成する。次に資本は、労働の生産物から賃金分を控除した残りの「節約され、蓄積された利潤が資本である」から、労働者は、労働者生産協同組合を組織することによって資本を形成し、蓄積することができる。もっと正確に言えば、「利潤は資本の形態で節約された、労働者階級自身の生活手段を上回る労働者の労働の剰余(overplus)に外ならない」のであるから、「もっとも多く節約する人がもっとも大きな資本を獲得する」のである。要するに、キングは、資本家が獲得する利潤の源泉は「不払い労働」である、と正しく認識しているのであって、この部分は労働者生産協同組合においては労働者のものとなるのである。さらに彼は、資本は機械や原材料のような生産手段=「不変資本」部分と、労働者の賃金、すなわち、生活手段=「可変資本」部分とに区別し、労働者は後者を消費することによって、資本家のために利潤と同時にこの部分(後者)を生産・再生産するのであるから、労働者生産協同組合にあってはこの両者が、すなわち、労働者の賃金=生活手段(キングはこれを「所得」とも呼んでいる)および利潤の双方が労働者組合員のものとなる、と論じる。キングは、このような資本のコンセプトをもって、一方で労働者が資本家のためでなく「自分たち自身のために労働する」には、先ず彼らの賃金=生活手段(所得)

部分を節約して創業資本としての「共同資本」を形成し、その資本で労働者生産協同組合を組織し、他方で組織された労働者生産協同組合において共同資本を蓄積して事業を拡大し、より多くの労働者が「自分たち自身のために労働する」ことが可能になれば、「労働者の所得」と「利潤」の双方が労働者組合員のものとなり、かくして前者は労働者組合員の生活を安定的にし、後者は共同資本の一層の蓄積の源泉となり、かくして、労働者生産協同組合が拡充していけば、労働者階級は雇用を安定的に確保し、独立を得て、貧困から抜け出して快適で安楽な生活を保障されるのである。

このように、キングは、混乱した資本のコンセプトをもってではあるが、労働者が自らの「生活と労働」のなかから資本を形成し、労働者生産協同組合によってさらに十分な共同資本を蓄積して、労働者組合員の雇用を創出し得る安定した経営をすることを主張したのである。ここまでキングの論じるところや主張を聴けば、彼のロジックの機軸が分かるだろう。そう、彼は、労働者の独立のためには、資本が不可欠であり、労働者は一人でできないことを集団による協同の力で共同資本を形成して、労働者生産協同組合を通じて一層の資本を蓄積しなければならない、と説いたのである。「労働者はいかにして資本を所有し、雇用を創出するのか」、これがキングの実践可能な目標であった。そしてさらに、彼は、消費者協同組合との連携・協力に基づいた「剰余資本」が獲得できる、一般の人たちのニーズを満たし得る労働者生産協同組合にこう言及して、労働者生産協同組合の重要性を労働者に教えたのである。

われわれは、われわれの剰余資本をもって何を行なうのであろうか。その回答はこうなるだろう―あなた方自身の組合員を雇用して、他の組合員のために靴や衣類を製造し、常に（雇用した組合員に）通常の賃金を支払い、その結果、利潤を共同資本に投入するのである。このようにして、協同組合は、資本が増大するのに応じて、組合員あるいは一般の人たちによって消費される品物を製造するために、組合員を雇用し続けるだろう。組合員のために製造を始めるのであるから、販売は確実である。協同組合の資本によって組合員が消費し得るよりも多くの財貨を生産することができるようになれば、協同組合は一般の人たち全体が必要としている品物を製造するに違いないだろう。[12)]

われわれは、この文章のなかに労働者生産協同組合にこめたキングの期待を見て取ることができるのである。

(3) 協同コミュニティ

先に、キングは労働者協同組合の形成を「究極的目的」とし、消費者協同組合の展開を「当面の目的」だと見なしていたことに触れておいたが、実は、彼にとっての最終目標という意味での「究極的目的」は協同コミュニティの建設であった。たとえ彼がそれについて平凡でありきたりの事柄しか述べなかったとしても、そうなのである。結論的に言えば、キングにとって労働者の独立の達成は労働者生産協同組合で可能であったのであり、オウエン主義的な協同コミュニティを経済的に自立可能な「社会組織体」として位置づけることは、彼にとっては大きな冒険であった。彼が、オウエンやトンプソンのような具体的でかつ「生産実

体」としてのコミュニティの建設を論じなかったのは、そのためである。キングの協同コミュニティの「理想像」は不鮮明である、と言わざるを得ないのである。それでも、彼が『協同組合人』のなかで協同コミュニティについて触れている部分を整理すると、次のようになる。すなわち、協同組合は、その組合員の一部をコミュニティの構成員にし、彼らに農業と工業のいずれかの仕事を与える。彼らの労働の全生産物は「共有財産」とされ、資本が蓄積されるのに応じてその他の協同組合員をコミュニティの構成員として迎え入れ、最終的にはすべての組合員を構成員とする。コミュニティは、病人や子供・高齢者を「共同の費用」で扶養し、児童教育も「共同の費用」で実施される。コミュニティは、婦女子の生産活動への参加を奨励し、剰余資本を「機械やその他の望ましい改良」に投入する。コミュニティの運営は、「資本の原理」ではなく、「労働の原理」に基づいてなされる[13]。このように、キングの構想する協同コミュニティは具体性を欠いていて、単に協同コミュニティ建設を示唆しているにすぎないのである。何故そうなのかと言えば、キングにとって、「共同資本による労働者の独立の達成」は労働者に雇用を保障し、快適で安楽な生活を保障し得る労働者生産協同組合によって実現可能であるし、また労働者にとって、労働者生産協同組合の試みは―オウエンが試みたコミュニティ実験である「ニュー・ハーモニー」の失敗に見られたように―困難な協同コミュニティの実験によるよりもはるかに確実性がある、と思われたからである。キングは、失業を救済し、労働者に雇用を保障し、失われた労働者の財産・地位・権利の、個人的にはなし得ない回復を集団的になし得る現実的「方法」を労働者生産協同組合に見いだしたのである。

キングの歴史的ポジション

キングは『協同組合人』第28号（1830年8月）を最後に筆を絶つと同時に運動からも離れる。彼がそうせざるを得なかった理由として、宗教上の非難にあった、大家族を抱えていて生活に余裕がなくなった、協同組合運動家から言われなき批判を受けた等々取り沙汰されているが、彼が協同組合運動から離れた本当の理由は定かではない。しかし、そうせざるを得なかった重要な原因があったことは確かである。彼は第28号で協同組合運動の前進を願って、こう強調した。

> 今やこの機関紙を終える時機である。この機関紙がそのために開始された目的は達成された。協同組合の原理は労働者階級の間に普及し、彼らの理解できるものとなっている。このような原理が実行される限り、協同組合が確実に成功することは明らかである、と確信してよいだろう。300もの協同組合がこの原理を試みるために始動している。これらの協同組合が、新たな壮大な実験を構成し、その結果が協同組合の実行可能性を証明するか否か、興味のある教訓的なところである。[14]

筆を擱(お)き、運動を絶つことを余儀なくされたキングのこの文章からは、われわれは「敗北感」や「挫折感」を見て取ることはできない。1832年10月にリヴァプールで開催された第4回協同組合コングレスは「キング博士への『感謝決議』」を満場一致で決めている事実からすれば、キングの協同組合の理念・思想は1844年のロッチデール公正先駆者組合に連なる困難な道程を歩んで行くことになる協同組合人にしっかりと受け継がれているのである。したがって、ここではキングが協同組合運動から

離れた原因を詮索するよりも、イギリス協同組合運動の歴史におけるキングのポジションについて触れ、今回の物語を終えることにしよう。

キングの歴史的ポジションは、一言で言えば、1820年代におけるロンドン協同組合の試み、1830年代前半の協同組合コングレスやアイルランド実験されたララヒン協同コミュニティ、そしてロッチデール公正先駆者組合という一連の、いわゆる「ロッチデールへの道」を切り開いてきた協同組合思想と運動の非常に重要な環を担い、協同組合運動に1つのきわめて重要な転換点をもたらした、ということである。それは、キングが「コミュニティ」に、①サービス組織としてのコミュニティ、②相互扶助組織としてのコミュニティ、③統治組織としてのコミュニティ、というコンセプトを与えて、「ロッチデールへの道」を準備したことを意味する。換言すれば、キングは、「協同組合＝コミュニティ」というコンセプトを協同組合の思想と運動に定着させたのである。「協同コミュニティ」から「コミュニティの協同組合」へ、この協同組合のコンセプトの転換こそが「ロッチデールの先駆者たち」の誕生を用意したのである。

次回は、このようなキングの協同思想を受け継いだ協同組合コングレス―ここではウィリアム・トンプソンが登場する―とレディ・ノエル・バイロンについて語ることにしよう。

1) T. W. Mercer, Co-operation's Prophet, The life and Letter of Dr. William King of Brighton with a Reprint of The Co-operator, 1828-1830, CU, Manchester, 1947, pp4-5.
2) Ibid., p.6.
3) cf. Ibid., pp14-15.
4) 共済組合および労働組合についてのキングの論究は、拙著『イギリス協同組合思想研究』（日本経済評論社、1984年）および拙論「ロッチデールへの道」（トム・ウッドハウス/中川雄一郎著『協同の選択：過去、現在そして未来』（生活ジャーナル社、1994年）を参照されたい。
5) T. W. Mercer, op. cit., p.71.
6) Ibid., p.53.
7) Ibid., p.63.
8) Ibid., p.73.
9) Ibid., p.161.
10) 協同組合コングレスは形式的には1831年～1835年の間8回にわたって開催されたが、実質的には1831年（第1回）～1832年（第4回）までのそれにおいて協同組合運動の重要な議論や決議がなされた。
11) T. W. Mercer, op. cit., pp.64, 79, 80, 88, 91.
12) Ibid., p.73.
13) Ibid., pp.53, 93, 94, 101.
14) Ibid., p.162.